

電

市川茂子

連勝をつづける少年棋士あれば今日は如何にとニュースを待てり
梅雨ながら日照りのつづき萎えてゆく草木に米のとき汁与う
ようやくに生き返りたる朝顔の花ひとつ咲き蒼つばみもありて
両の手を広げしほどの庭にして茗荷は花を付けておりたり

夜の明ける刻早くなり空見上ぐわたしに残る時間いかほど

もらいたる玉蜀黍とうもろこしの皮をむくふいに懐かし皮の感触

里山のくらしを今に思い出づ帰るすべなく年を重ねて

雷鳴のひびき頭上にすさまじく息ひそめつつ過ぎゆくを待つ

狂おしく窓を打ちくる電ひょうの礫つぶて如何な仕わざかうろたえながら

天外のこわれしほどに電の礫降りたるのちは梅雨明けならん